

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530922

研究課題名(和文) 児童養護施設入所児童のサクセスフル・アダプテーションを支える要因：追跡研究

研究課題名(英文) The factors supporting successful adaptation of institutionalized children: a follow up study

研究代表者

向井 隆代 (MUKAI, Takayo)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：00282252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：児童養護施設に入所中の幼児児童の心理社会的発達を継続的に調査し、適応を支える要因を明らかにすることが本研究の目的であった。幼児期から児童期にかけての保護因子として着目していた対人関係の枠組みを検討した結果、重要他者が明確な児童は、さまざまな場面で愛情の欲求を向ける対象が明確でない児童に比べ、仲間からの受容感が高く、不安やうつなどの内在化された問題行動も少なかった。さらに愛着関連機能に着目すると、愛着関連の欲求を向ける対象の存在があることは特に女兒において適応的に働いていた。また、入所児童の中でも虐待経験がある児童には、語彙の発達の遅れや内在化、外在化双方の問題行動が多く、継続調査が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to understand the factors which support psychosocial adaptation among institutionalized children. Based on the assessment of social network, the children with a central figure perceived greater peer acceptance and reported less internalized problems such as depression and anxiety, compared to the children with no central figures who meet their affectional needs in various situations. Moreover, having an identifiable figure who serves attachment related functions lead to better adjustment, especially among girls. The children with a history of abuse exhibited delay in verbal ability and reported more internalizing and externalizing problems, compared to other children within the same institutional setting. Further research is called for to follow up these children at risk.

研究分野：発達心理学 臨床心理学

キーワード：施設入所児童 心理社会的発達 縦断的研究 適応 可塑性

### 1. 研究開始当初の背景

虐待や貧困、養育者の精神疾患などのリスク・ファクターを伴いながらも少なくない数の人々が適応的に成長していく過程はサクセスフル・アダプテーション(適応的な発達)と呼ばれている。近年、リスク・グループにおける適応的な発達を可能にするresilience(可塑性)を支える要因(保護因子)やそのメカニズムへの注目が高まっている。

海外ではリスク・グループの成長を長期間追跡した研究が存在し、気質、知的能力、肯定的な自己像といった子ども自身の特徴や、養育者はじめ家族内外の大人や年長者による支援、良好な仲間関係など子どもの周囲の環境の要因が保護因子として挙げられている。しかし、日本での実証的研究はまだ乏しく、特に施設入所児童などのリスク・グループを対象として、長期的な適応とその関連因子を検討する試みはまだほとんど行われていない。

### 2. 研究の目的

本研究では、児童養護施設入所児童を対象に平成19年度に開始した研究を継続し、発達初期の生育環境に虐待や家族との離別などが含まれるリスク・グループの児童の発達を追跡し、適応のメカニズムとそれに関わる個人内外の要因を実証的に明らかにすることを目的とした。

幼児期からの多面的なデータが得られている施設入所児童に加え、本研究期間中に新規に入所した未就学児についても情報を収集し、小学校低学年から中学年まで4年間調査を続け、発達の比較的早い段階における保護因子が成長とともにさらなる保護因子に結びついていく可能性や、後の可塑性の基盤になる可能性を明らかにしていくことを狙いとしている。

### 3. 研究の方法

平成19年度に調査を開始し、現在も協力が得られている3か所の児童養護施設に入所している子どもと児童担当職員を対象に面接調査と質問紙調査を行った。幼児に対しては行動観察も行った。

個々の児童の生育歴や虐待経験の有無も含め入所の経緯等の基礎的情報については、職員からの聞き取り調査を実施し、データベースを作成した。

職員に対する質問紙調査では、担当児童の気質的特徴、愛着行動、外在化、内在化双方の問題行動について記入してもらった。面接調査では、しつけ方略や発達期待、また入所後のライフイベントについて聞き取り調査を行った。

幼児と低学年児童への個別面接調査では、語彙力の測定、感情理解課題、コンピテンス(自己効力感)、対人関係の枠組み、家族イメージの測定を必要に応じて図版を用いて実施した。また、5歳から7歳までの児童に

は実行機能を測る課題も個別に実施した。

小学校6年生以上の児童には、コンピテンス、学校適応、攻撃性、共感性、性役割観を含む個別質問紙調査も実施した。

### 4. 研究成果

4年間の調査期間中には、家庭引き取りになった児童もいれば、新規に入所してきた児童もいる。追跡調査の終了時点で調査に協力している児童は53名(5歳~11歳)であり、心理的にも社会的にも適応に大きな課題を抱えていると考えられる児童はそのうちごく少数である。しかし、一般家庭で養育されている児童を対象とした報告と比較すると、本研究の対象児童には語彙力の発達の遅れがみられることや、外在的、内在的問題行動が全般的に多いことは否定できず、適応に課題を抱える児童が今後増加する可能性もある。以上のような状況をふまえ、これまでに得られた結果は主に以下のような点である。

#### (1) 幼児期から児童期中期への適応を支える保護因子について

特に着目している対人関係の枠組みの発達の仕方は、一般家庭で養育されている児童における報告とは異なる傾向が認められた。施設入所児童では、対人関係に関心が乏しい児童は少ないものの、幼児期には担当職員の変更や養育環境の変動に影響を受けやすく、重要他者が定まらない児童が多かった。しかし、年齢があがるにつれて構造化が進み、重要他者が明確になっていく児童の割合が増加した。施設入所児は、複数の重要他者に心理的機能を割り振り、枠組みを柔軟に発達させていくと考えられる。重要他者が定まっている児童はそうでない児童に比べて全般的な適応度が高く、特に女兒において、愛着機能を満たす重要他者が存在することは、不安や抑うつなど内在化された問題行動の抑制につながる可能性が示唆された。

近年重要性が注目されている自己制御機能も将来の適応に関係すると予想している。行動や思考をコントロールし、自己を意識的に制御する機能は、フラストレーション耐性や問題解決能力の発達にも関わると考えられる。5歳から7歳の児童を対象に実施した結果では、個人差が大きく、衝動性との関連が示唆されている。

#### (2) 虐待経験と適応の関連について

本調査対象者の児童のうち、何らかの虐待を経験した児童は全体の約40%である。虐待経験のある児童は、経験のない児童に比べて、語彙の発達に遅れが見られ、攻撃性や衝動性が高い傾向がある一方で、抑うつや不安といった内在化された問題行動も多く報告されている。今後の分析では、縦断的な分析を行うことにより、虐待の長期にわたる影響を検討するとともに、重要他者の存在が特に虐待経験のある児童にとって保護的に機能する

かどうかを検討したい。

### (3) 今後の課題

これまで追跡してきた調査対象児童には、学校適応や心理社会的適応において大きな課題を抱えていると思われる児童は少ない。しかし、今後、心身共に変化の大きい思春期の時期に中学校への入学という環境の変化に対応し、自己肯定感を維持し、将来の進路選択や自立への準備に向けた課題に取り組みなければならない青年期には、これまで以上に社会的サポートが必要である。調査を継続することにより、施設入所児童の青年期への移行を支える要因を明らかにしていく必要がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 14 件)

佐伯素子・齋藤千鶴 (2014) 児童養護施設入所児童の問題行動の変化 姉弟の事例を通して . 日本発達心理学会第 25 回大会発表論文集, 196. 2014 年 3 月 21 日 京都大学(京都府・京都市) .

Mukai, T., Saeki, M., & Saito, C. (2014) The development of social network as a protective factor in institutionalized children in Japan. Poster presented at the 9th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology. Poster Session Overview and Abstracts, 58. July 14th, 2014, London, England.

齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 (2014) 児童養護施設入所幼児のファンタジー行動の測定(3) 日本心理臨床学会第 33 回大会発表論文集, 339. 2014 年 8 月 24 日 パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市) .

齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 (2013) 児童養護施設における子どもの育ちの環境～施設職員における発達期待と学習期待の特徴～. 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 110. 2013 年 3 月 15 日 明治学院大学(東京都・港区) .

Mukai, T., Saeki, M., & Saito, C. (2013) Social network and psychological adjustment among institutionalized children in Japan with and without history of child abuse. Poster presented at the 16th European Conference on Developmental Psychology. September 5th, 2013, Lausanne, Switzerland.

齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 (2013) 児童養護施設入所幼児のファンタジー行動の測定(2) . 日本心理臨床学会第 32 回大会発表論文集, 434. 2013 年 8 月 26 日 東京大学(東京都・文京区) .

佐伯素子・向井隆代・齋藤千鶴 (2013) 児童養護施設入所児童のサクセスフル・アダプテーションを支える要因(3) . 日本心理臨床学会第 32 回大会発表論文集, 433. 2013 年 8 月 26 日 東京大学(東京都・文京区) .

齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 (2012) 児童養護施設入所幼児のファンタジー行動の測定. 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 146. 2012 年 3 月 10 日 .名古屋大学(愛知県・名古屋市) .

佐伯素子・向井隆代・齋藤千鶴 (2012) 児童養護施設入所児童のサクセスフル・アダプテーションを支える要因(2) 抑制課題中の子どもの行動と注意 . 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 147. 2012 年 3 月 9 日 名古屋大学(愛知県・名古屋市) .

Mukai, T., Saeki, M., & Saito, C. (2012) The relationship between social network and behavioral problems in institutionalized children in Japan. Poster presented at the 20th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. August 20, 2012 Paris, France.

齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 (2012) 児童養護施設で暮らすということの社会的評価(3)～かわいそうとみなされる子どもたちへの心理学的研究～. 日本心理臨床学会第 31 回大会発表論文集, 2012 年 9 月 15 日 愛知学院大学(愛知県・日進市) .

齋藤千鶴 (2012) 児童養護施設入所幼児における行動と気質の特徴～CBCL (Child Behavior Checklist/4/18)とBSQ (Behavioral Style Questionnaire)を用いて. 日本家族心理学会第 29 回大会発表論文集, 2012 年 7 月 15 日 東京学芸大学(東京都・小金井市) .

齋藤千鶴・佐伯素子 (2011) 家族・親イメージと子どもの行動特徴との関連(4)～児童養護施設に入所中の幼児を対象としたCATに関する基礎的研究その3～. 日本家族心理学会第 28 回大会発表論文集 2011 年 8 月 28 日 鹿児島女子短期大学(鹿児島県・鹿児島市) .

Mukai, T., Saeki, M., & Saito, C. (2011) The development of social network among

institutionalized children in Japan.  
Poster presented at the 15th European  
Conference on Developmental Psychology.  
August 24, 2011 Bergen, Norway.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向井 隆代 (MUKAI Takayo)  
聖心女子大学・文学部・教授  
研究者番号 : 00282252

(2) 研究分担者

佐伯 素子 (SAEKI Motoko)  
聖徳大学・心理・福祉学部・准教授  
研究者番号 : 80383454

(3) 研究分担者

齊藤 千鶴 (SAITO Chizuru)  
聖徳大学・心理・福祉学部・講師  
研究者番号 : 20407597